

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／安田 雅
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

灯火をもって集う

教区は毎年七月から新しい年度が始まります。そこで年度末に際して二〇二四年度の教化センターの取り組みを振り返ってみたいと思います。まず、今年度よりあるべき教区教化の姿を検討する。ための取り組みを始めました。具体的には教



ご本尊・お内仏を課題にスタッフ学習会

化センタースタッフによる検討会議①と、教化委員会、別院職員からの選抜メンバー、教区駐在教導による検討会議②という二つの会議体を中心に、活発な議論を展開しています。また、教区

もくじ

- ・研究報告 「教如上人辞禄の御遺志」^{②・③} について
- ・研修報告 教化センター研究生 第14期生 修了報告 ^{④・⑤}
- ・研究報告 グリーフケアの方向 ^⑥
- ・研究報告 「真宗の仏事 研究・学習班」 ^⑦
- ・INFORMATION ^⑧



グリーフケア公開学習会

教化に携わる多くの方々からの意見を聞きながら、慎重かつ着実に検討を進めていきます。

研修業

「化」、そして「真宗の仏事（特にご本尊・お内仏）研究・学習班」という四つの研究課題に取り組んでいます。それぞれの研究課題においては、長らく希求されてきたスタッフ体制が整いつつあります。これは、教化センターの事業を活性化させる上でも重要なことです。スタッフ相互の多角的な視点からそれぞれの学びを深められていくことが期待されます。



史料調査の様子

務では、二年にわたる「正信偈」をテーマとした「聖典研修」が終わり、次年度からは「観経」を学びます。また、時代社会に即応しつつ、課題を深めるための「特別講座」を開催しました。また、研究生第十四期生が三年間の学びを修了し、新たな一歩を踏み出した（本紙四・五面に修了報告を掲載）。その学びの姿を受け継ぎ、次年度からは新たに研究生第十五期生が歩み出します。

研究業務では、「大谷派の近現代史」「尾張の真宗史」「現代社会と真宗教

教化センターは、教区の一人ひとりが灯火をもって集う「広場」でありたいと願っています。一人ではその火が消えてしまうことがあるかもしれませんが、しかし、教化センターという場に集い、照らし合うことで、より大きな炎となるのではないのでしょうか。この灯火を道しるべとしながら、教区教化のセンターの可能性を模索していきます。



スタッフによる「平和展」展示解説

研究報告

「教如上人辞禄の御遺志」について
教如・厳如両上人連座御影の精神的背景

小島 智

はじめに

前回「センタージャーナル」一一六号にて「尾張の真宗法宝調査レポート」と題し、名古屋教区第七組と第二九組（と

もに稲沢市・一宮市）で共有される教如・厳如両上人連座御影を取り上げ、概要について述べさせていただいた。そこでも申し上げたが、現在この御影は第七組と第二九組の寺院で巡回され、それぞれ年一度、これを奉懸しての法要が、組内住職の参勤と地域門徒の参詣により勤めら

れている。この度（三月六日）、筆者はその法要にて講話を担当するご縁を得たが、本稿では、その時の話の一部をまとめさせていただこうと思う。

前稿でも述べたが、本連座御影は真宗大谷派の相統講創設五十周年を記念して、昭和十（一九三五）年八月、本山つまり真宗本廟（東本願寺）より「名古屋教区中」に下付されたものである（同時に全他教区へも下付）。それは相統講の挺入れと拡張を企図して、翌十一年四月に本山にて厳修される記念法要を前に下付され、教区内各組を中心とした単位で、それを奉懸しての勤行と聞法の場合開設されることが求められたのであった。そしてその趣旨が、昭和十年八月二十八日付で宗務所より発示された「書立」に詳しく表されていることは前稿の通りであるが、その冒頭にある次の言葉に注目したいのである。すなわちそこには、

相統講ノ儀ハ去ル明治十八年厳如上人ノ御創設ニカ、リ普ク門葉ヲシテ其趣意ヲ体セシメ益歴代伝灯ノ法義ヲ相統シ教如上人辞禄ノ御遺志ヲ紹キテ本廟ノ護持ニ資セシメント企画遊サレ候トコロ、

とあり、相統講が明治十八（一八八五）

年、厳如上人の創設にかり、法義を相統し「教如上人辞禄ノ御遺志」を受け継いで、本廟の護持に貢献することを願っていることが述べられているのである。東本願寺創立は言うまでもなく、第十二代教如上人によって成し遂げられた訳であるが、では本廟護持のために受け継がれるべき、この「教如上人辞禄ノ御遺志」とは何であるか？ある意味、それこそが相統講の精神であり、連座御影法要の精神的背景となつていと言つても過言ではないと思われるのである。

実は、それを窺わせる伝承が「御本山御無禄之由来」として残されている。次に紹介するのがそれであるが、天明八（一七八八）年から昭和四十五（一九七〇）年まで真宗大谷派の暮戸教会（岡崎市暮戸町）を中心に記述された、東本願寺三河門徒の動向記録である『三河大谷派記録』（暮戸教会蔵）の冒頭に掲載されているものである。

御本山之儀者、御開山様已来、都鄙一同御経回被為在之、親く御化導被為遊候御事ニ而、其後 教如様御代、慶長六年八月十六日、教如様御隱室江、東照宮様被為在 御成、白銀三百枚・布三百端被下置、其節御嫡家之御当山御取建被成下候旨被 仰出、敷地之儀可被下置旨被 命候事、依之翌十七日、右之御礼として、教如様伏見江御登城被為在之候処、御対顔之上、御寺領御附可 下置 上意之処、教如様被 仰上候者、誠ニ無残処、奉蒙

御懇命辱、奉敬承候得共、尊大之寺領拝領仕候而者、一生安逸之身と罷成、門末江之教導も怠り可申、然ル時ハ宗祖江対シ、不本意ニ御座候得者、寺領之儀者、御断申上候、何卒諸国末寺・門徒ヲ親く教導致シ、右之帰依信施を以本廟相統仕度候得者、右教導に付、何方ニ而も差構無之、抑（仰）被成下度段御申上之有之処、寺門之本意、左も可有之事と 御感不斜上意被為在之候、²文中に「慶長六年八月十六日」とあるように、これは慶長五（一六〇〇）年九月の関ヶ原合戦に勝利し天下人の地位を獲得した徳川家康が、翌年八月に教如上人の「御隱室」つまり隠居所を訪れ、「御嫡家之御当山御取建」を申し出た際の逸話である。

周知のように、教如上人は文禄元（一五九二）年十一月、第十一代頭如上人の急逝後、一旦本願寺住持職を継承する。ところが、翌文禄二年、頭如上人の内室如春尼が、太閤・豊臣秀吉に三男准如を後継とする旨の頭如上人讓状を示す。そこで秀吉は、一旦教如上人が継職し十年後に離職して准如上人に譲るよう裁決を下し、教如上人もそれを了承するが、配下の坊官が讓状の真偽に疑問を持ち抗議したことで秀吉の怒りを買ひ、教如上人の即時退職が通告され、本願寺第十二代は准如上人が継職することになるのである。そのため、教如上人は本願寺（西本願寺）境内の北に屋敷（「北の御所」）を建てて移り住み、「裏方」と呼ばれるようになるが、実際には隠居生活を送らず、住



当日の法要における講話の様子（一宮市・専福寺にて）

持職としての職務を遂行していくのである。こうして退職後も住持職として活動し続けたことにより、結果的に教如上人独自の教団が形成されていき、その教団形成を追認する形で、慶長七（一六〇二）年二月、家康から京都烏丸六条の寺地（四町四方）寄進を受けて東本願寺が別立されるのである。

ここに引用した逸話は、まさにそれに先だつて家康から寺地寄進の提案を受けた時のやり取りである訳だが、重要なのは、八月十六日に隠居所である「北の御所」を家康が訪れた後、翌十七日に、今度は教如上人が寺地寄進のお礼として伏見城の家康の元を訪ねていることである。そしてその際、家康から寺地の寄進だけでなく、寺領の寄進まで申し出られていることである。しかし、教如上人はその申し出に対し、身に余る寺領を得てしまうと何もせず、それに頼り、結果、末寺・門徒衆への教導（教化活動）も怠つてし

まう。それでは宗祖に対して誠に申し訳ないこと故、寺領拝領についてはお断りしますと、明確に辞退の意を表明しているのである。さらに、末寺・門徒衆を教導し、その際の「信施」（門信徒の布施）によつて本廟（東本願寺）の相続ができるよう、諸国での教化活動の裁可まで願ひ出てそれが認められていることにも注目されよう。

「寺領（禄）」ではなく「信施」による本廟相続。何よりも教化活動を第一義とする教団形成。これこそが「教如上人辞禄ノ御遺志」の真意であり、自身の教団設立・東本願寺別立の願ひであつたと見て取れるのである。もっともこの逸話は、教如上人と同時代の史料で確かめられている訳ではない。江戸後期の史料に「御無禄之由来」としてあるだけであり、その点は注意が必要である。しかし、その内容は明らかに教如上人が「禄を辞した」ということであり、それが「辞禄ノ御遺志」との言葉でも表現されていたと見



莊嚴された教如・厳如両上人連座御影

て間違いないと思われる。そしてその言葉が、昭和十年の大谷派宗務所「書立」に明示されているということは、第二次大戦前までは教団内で広く認知されていた伝承であつたと考えられるのである。それは教如上人以後も東本願寺（大谷派）教団の根本精神となつたものであり、そのまま「法義相続・本廟護持」という、相続講の理念へ受け継がれていったと言えるのではなからうか。

結びにかえて

以上、相続講創設五十周年記念の教如・厳如両上人連座御影下付と、それを奉懸しての法要の精神的背景である「教如上人辞禄ノ御遺志」について、その内実を検討してみた。『センタージャーナル』一一六号での前稿で述べたように、昭和十一年八月の全教区への下付直後から、名古屋教区では春と秋の年二回（基本三月と九月）、御影を奉懸しての法要が、本山からの特派講師を招き各組（当時は全二二カ組）を巡回して勤められたが、おそらくその場では教如上人のこの「御遺志」が幾度となく講説されたものと推測される。ただ戦後は、詳しい経緯は不明であるが、旧七組の第七組と第二九組のみで執行されるようになり、「御遺志」についても次第に省みられなくなつてしまつたようである。

しかし、教化活動は現在の大谷派教団にとつても第一義とすべきものである。とすれば、ここに挙げられる「辞禄ノ御遺志」に学ぶべき点は誠に多いと思われる。

さらにまた、第七組と第二九組のみとなつてしまつた連座御影法要の意義も再確認されるべきであり、大切な真宗仏事として拡大継承されていくことが望まれると言えよう。

¹ 真宗大谷派宗務所発行『真宗』第四〇七号（昭和十年九月）一頁。また、名古屋教務所発行の『名古屋教報』第五五号（昭和十年十月）にも掲載されている。

² 『三河大谷派記録』（真宗大谷派岡崎教務所、二〇〇七年）十二頁。

³ この譲状については今日に至るまで真偽論争がある「神田千里『顕如』（ミネルヴァ書房、二〇二〇年）第六章第二節参照」。ただ、いずれにしてもこの背景に、大坂本願寺と織田信長との戦い、いわゆる石山合戦（大坂本願寺戦争）の終決に際し、和睦を主張する顕如上人派と、徹底抗戦を主張する教如上人派の対立があつたことを踏まえる必要がある。なお、大坂本願寺退去から本願寺東西分立に至る過程については、『教如上人と東本願寺創立』（真宗大谷派宗務所出版部、二〇〇四年）、『教如上人』（真宗大谷派宗務所出版部、二〇一三年）、『増補改訂本願寺史第二卷』（本願寺出版部、二〇一五年）第一章第一節等を参照。

史料調査等を通し、ともに学ぶスタッフを募集しています。お気軽にお問合せください。

研修報告

教化センター研究生 第十四期生

修了報告

二〇二五年四月二十四日、教化センター研究生第十四期生の修了式が行われた。世代も、これまでの歩みも大きく異なる者が共に学び、意見を交わした三年間は、かけがえのない「時」と「場」となった。

修了式では各自、研究生として歩む中で学んだこと、感じたことなどを自由に報告する機会を設けた。今号では、その報告の一部を掲載させていただく。

今回、研究生修了報告にあたり、テーマを「聞法は暮らしの中にある」と定めました。その根拠は、三年間自分なりに課題を持って学んできた結果、仏法を学ぶ根本は、日々の暮らしと密着したものでなければならぬ、という結論に改めて思い至ったからです。

それを裏付ける大きな出来事として、長く闘病生活を送っていた父が、今年はじめに亡くなりました。この葬儀は研究



修了証授与式 (2025年4月)

生の三年間の集大成とも言っても過言ではない出来事でした。父の死に顔は「怠けず精進せよ」と、私を叱咤してくれているように

に感じました。最も感動した事柄は、お念仏のありがたみ、大事さを改めて実感したことでした。「お念仏によって人生のまことが輝く」と曾我量深先生は『歎異抄聴記』の中で語っておられます。そのことを父が身をもって知らしめてくれたものと、身が引き締まる思いでした。

私には重篤な基礎疾患があり、この先それほど長くは生きられません。残された限りある時間の中、「法に生きる」ことを願い、「仏の教えを聴く」生活を、お念仏とともに継続していきます。いや、お念仏しかないのだらうと思います。まさに「念仏にまざるべき善なきゆえに」(『歎異抄』第一章)です。それが広義の意味で、日々の「暮らしの中に聞法を存在せしめる」ものだと思います。

池上 秀隆

真宗本廟奉仕団の講義の中、『大経』下巻の「汝、起ちて更に衣服を整え」を通し、「座っている私に過去の価値観を棄てて、法蔵菩薩の願いを受け止め応答しなければ本願は成就しない」ということを教わりまし

た。大変難しく、そのように受け止められませんでした。このことがきっかけとなり、『大経』の学びを始めようと思いました。また「わかっていても、わからなくても念仏申しなさい。そして念仏に育てられなさい」という法語にも出あいました。「念仏一つ」とはこういうことかなと思いました。ありがたいご縁でした。

私は夫婦二人で平穩に暮らしてきましたが、あるトラブルに遭遇し、厳しい状態に追い込まれ、聞法してお友達に出あうという日々も保てなくなっていました。苦しい時、悲しい時、自分勝手にきりきり舞いしている時、諸先生の助言や研究生の皆さんの優しい眼差しをいただき、この娑婆を生きる力を頂きました。「娑婆のことはタンタンと、お念仏は一心専念に」と仲間

尾関 邦子

研究生の学びの中、私自身が得たものをいくつかお話しします。一つは諸先生方の講義を通して得られた新しい知見です。荒山淳先生は『観経』「王舎城の悲劇」を力強く講義くださいました。苦悩に沈むイダイケが自身の凡夫であることに気づかされていく歩みを聞き、「三願転入」を深く考えることができました。また、グリーンケアの学びではケアの現場での死生観を聞くことができ、法務でお会いする、自身の病気を話してくださる御門徒さんに対する姿勢が変化したと感じました。

二つ目は、座談会の司会進行の経験です。今まで司会をしたことがなかったの

で、私にとって貴重な機会でした。また座談会の中、共に学ぶ研究生から聞くことができた様々な人生経験や人生観は、私に多くの学びと問いを与えてくださるものでした。

これらの学びを通して改めて、真宗の「自信教人信」、私自身の聞法の在り方が問われているのだという自覚が芽生ええました。これこそが研究生の学びで得られたものだと感じています。

加藤 心華

「南無阿弥陀仏を称えれば助かる。助からなければ称えないのか」、そういった損得の動機で学んでいたことを研究生一年目が終わる時に気付き、恥ずかしく思いました。そこで、残りの二年間は蓮如上人が『御文』の中で言われる「信心決定」を念頭に学びました。

池田勇諦先生は「衆生の信心はフラフラしてあてにならない。凡夫は信心決定できない」とおっしゃられました。また中村薫先生は、入院中の病室にて「南無阿弥陀仏」と称えたけれども、一向に回復しない。しかしある時ふと「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」という言葉が出てきたそうです。そうしたら気が楽になったとおっしゃっていました。

他にも色々な先生方に信心について尋ねてきましたが、皆、異なる表現で教えてくださいました。今、私は信心決定したかと問われれば、決定したとは言えません。だからこそ、荒山淳先生が教えてくださいました。「自他の仏法の語らいの中で信心が芽生えてくる」ように、この先も

聞法を続けていきたいと思うのです。
佐藤 和生

研究生の三年間、様々な先生方からたくさんの方の講義をいただきました。しかしどれだけの内容を受け止めることができず、たかと言え、自信はありません。反省したい点であります。しかし、講義の資料はきちんと手元に残してありますので、勉強をし直すことはできます。

一番心に残っているのはグリーンフケアの学習です。研究生だけではなく、組の推進員養成講座でもグリーンフケアを学びました。それで私自身何ができるようになったというよりは、特にありません。しかし、お寺離れも進み、何を頼りにして良いのか分からないという現代。大切な人を亡くした時に一番大切になるのはお寺さん、そしてお念仏の教えだと思えます。それらによって、自分自身が助かるということがあるのではないかと思うのです。

このグリーンフケアを残された人達にどう伝えていくのがか、お寺にとって重要なことだと感じました。門徒としては手を出すが、今後皆さんと一緒に学び続けていきたいと思えます。

鈴木 宏司

お参りの際、あるご門徒が「私は仏様よりも亡くなった人のことを大切に思う」と言われました。それにより、私と、ご本尊と、亡きご先祖と、浄土真宗においてこの三点はどう関るのかということが私の課題となりました。

『御消息拾遺』には、亡き方はお浄土に

還つていかれる。私達もその場に往き生まれ、出あい、救われていくことが語られていて感じました。浄土真宗においては、亡き先祖を憶うというより、還つていかれた浄土に思いを馳せることを大切にしてこられたということだと思えます。そして、そのためにも、ご本尊を中心に据えたお仏壇、本堂などの形ある場が作られ、仏事として手を合わせてきたのだと思えます。

本尊に心を向けず亡き方に手を合わせる時は、対外的に感謝を述べる以上のことは出てこないのではないかと。そのままの私を受け止めてくださる阿弥陀仏の願いに出あう仏事として手を合わせる。そのことを通し、亡き方から願いをかけられていての私自身の在り方が見えてくると共に、願いをかけている諸仏として、亡き方と出あうのだと思えます。

松本 顕

大学卒業後すぐに研究生になりましたが、その頃はまだコロナ禍の真最中でお参りが減少するなど、生活様式の変化によって戸惑っていた時期でもありました。それでも前向きな姿勢で学び、日々のお参りにも向き合うことができたと思えます。

学習会で印象に残っているのは、池田真先生の「どうしてお勤めするのか」についての学びです。私は法務で月参りに行きますが、亡き人と共に、仏の回向をいただき続けることが大切なのだ、講義を通して感じました。その回向には、講義を続けながら幸せに生きてもらいたいという願いもあるのだろうと思えます。

座談の場では、講義を通して気づいた

疑問や問題を話し合いました。その際、無知な自身を知らされると同時に、新たな気づきや発見に触れることができました。この「新たな気づきを得る」ということの大事さを知らされたことが、研究生の三年間の中で一番の収穫でした。出あえた言葉や課題を今後も見直しつつ、学び続けていきたいです。

三輪 英之

池田真先生の最後の講義で「私を生きていく智慧をいただく。それが南無阿弥陀仏の聞法である」と教わりました。辞書で調べてみると、「私」という言葉は「わたくしの転」とあり、「わたくし」は「自分自身のこと、自分だけの利益や都合を考えること」とあります。自己中心を表す言葉のようですが、「生きる」という言葉が付くと違ってきます。自分の利益や都合だけで「私を生きる」ことはできません。娑婆に生きる私達は互いに助け合わなければ生きることが難しいと思えます。

では、人は人を救えるのか。

人を救うことを「慈悲」と言います。『歎異抄』では「おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし」

と、人が人を救うことはできないと述べられています。非常に困難であるからこそ、私達は自分で救われる道を探すことになり、南無阿弥陀仏と称えて教えをいただいていくのだと、先生は述べられたのだと思えます。娑婆の中で生き、そして行き詰まった時、聞法によっていただいた教えから自身の在り方を見つめ、修正しながら生きていくことだと思えます。

山口 初一

『真宗聖典』を初めて手にした時、そのずっしりとした重みを感じてびっくりしました。学びたい気持ちはありながらも、知らないことばかりで心配もありました。聖典を開けば難しい言葉ばかりで不安は募ります。そこで思わず「なぜ私のように何も知らない人間が研究生になれたのか」と先生に尋ねると、「ご縁ですよ」と言われました。胸のつかえが取れ、この言葉に救われたように思いました。おかげさまで三年間、休まず頑張ることができました。

今年に入って、仲の良かった従兄弟、母、そしてまた別の従兄弟と、間を置かず立て続けに縁有る方との死別がありました。何も考えることができなくなり、悲しい。そんな時に「ご縁ですよ」という言葉を思い出し、この別れもご縁だったのだと思ひ、受け入れることができました。まだ気持ちの整理はできていませんが、今は自分の始まりというものを痛切に感じています。

横井 ヨネ



真宗本廟 諸殿拝観 (2024年2月 奉仕団にて)

研究報告

グリーンフケアと真宗教化②
グリーンフケアの方向

吉田 暁正

悲しむことが難しい現代

災害や事故において、死別や離別から悲嘆が生じる。医療において、病と死に関わる悲嘆が生じる。介護において、老いに関わる悲嘆が生じる。様々な現場から、そこに生じる悲嘆に対して、心のケアが必要だという声が挙げられている。喪失による悲嘆は、古来人間が抱えてきた姿であり、自然なことであろう。そして、老病死に関わる問題は、仏教が問い続けてきたことでもある。人として生まれ、生きていく上で、誰もが悲嘆を抱えながら苦悩している。それは特別なことではなく、根本的な課題としてたずねてきたことではないか。

しかし、どのように悲嘆に向き合えば良いのかということがわからず、苦悩を深めているという現状がある。それによって精神科医、カウンセラー、臨床宗教師など、専門家による対応が求められることもある。悲嘆を抱えることは自然なことであるにもかかわらず、特別に対応しなければならぬ事態になったのはなぜだろうか。悲嘆を語ることや向き合うことが非常に難しくなったことは、現代社会の課題であり、だからこそ様々な取り組みが興起したといえる。

その中でグリーンフケアという動きも生まれてきた。特に、喪失により起こる姿を「グリーン」という言葉で丁寧に見ていくことは重要であろう。悲しみや悲嘆という言葉で語られることが多いが、実際に起きる影響や反応は多様である。また、心の問題だけではなく、身体や行動にも表れることもある。「グリーン」という表現によって確かめていくことは、その多様な姿を決めつけず、否定せず、一人ひとりと丁寧に出あつていくことにつながるのではないだろうか。

「グリーン」：人やものなどを失うことにより生じる、その人なりの自然な反応、状態、プロセス
「グリーンフケア」：グリーンを大切にすること

悲しみは乗り越えなければならぬのか

グリーンは否定されるべきものではない。喪失によって大きな影響や反応が生じることは、大切な存在との出あいの証でもある。だからこそ、そこに生じたグリーンを丁寧にたずねていくことが大切

ではないかと思う。

ただ、その姿を表に出すことがためらわれることから、その向き合い方に苦しむ状況が生まれているのだろう。世間的には、悲しみからの回復や乗り越えることが求められる。その期待に応えようと努力するが思うようにならない。自分の計らいを超えてグリーンが生じているため、計らいではどうにもならない。乗り越えることや立ち直ることが強く求められる周囲の圧力から、乗り越えられないことに不安と焦りを感じて自分を責めてしまうことも多い。苦しみに苦しみを重ね、グリーンを大切に生きていくことが難しくなる。

グリーンは乗り越えるものと考えよう、それとともにどう歩んでいくのかをたずねていくことが大切である。喪失した大切な存在との関係を歩む一つのプロセスとして、グリーンフケアを考えていくことが必要ではないだろうか。グリーンは異常ではなく自然な姿であり、そこからの歩み方も一人ひとり異なる。その一人ひとりの姿が尊重されていくために、まずグリーンについて知ること、伝えることが大切である。その共有と周知が、グリーンを生きやすい世の中につながればと思う。

仏事の方が悲しみの姿を受けとめてくれる

グリーンに対する取り組みは様々な現場で進められているが、年忌法要、月忌

参りなどの仏事は、すでにグリーンフケアのはたらきを持つ場として勤められてきたと言えるだろう。亡き人を偲び、出あい直すことができる仏事は、自分なりのグリーンを抱えていく歩みとして大事な機会となる。亡き人を思い返して涙を流したり、笑ったり、一人ひとりの姿が尊重され、受けとめられていく場として、ご本尊を中心に仏事が開かれてきた。その仏事のはたらきを大切に、喪失の中で抱えている自分の思いを表現できる場づくりができればと思う。

グリーンを語れる社会に

現代社会は、グリーンを表現することが難しい。元気に明るく楽しく生きることを求めていくことも大事だが、人生はそれだけで押さえられるものではない。喪失によって抱えるグリーンもまた、生きていく上で避けられないことであり、そこから大切なことを学ぶことがある。グリーンフケアを特別なことにせず、日常の中で大切にできることとして共有できればと思う。そして、お互いを尊重し、グリーンを日常で語れる社会になればと思う。そのような願いをもとに、お寺からグリーンフの学びを始めていきたいと考えている。

私もグリーンを抱えた一人

自分自身のグリーンを丁寧にたずねていくことが他者のグリーンに向き合うあり方を考える上で重要

「真宗の仏事(特に)ご本尊・お内仏」

研究・学習班」報告

現代社会において「宗教離れ」という

ことがいわれるが、それは一人ひとりの生活における「ご本尊喪失」の姿に象徴されるのではないだろうか。自宅にお内仏が無くて一向にかまわないのである。今こそ、ご本尊、お内仏を課題としなければいけない、という問題意識のもと、お内仏等の意味やお飾りの仕方を紹介した冊子『お内仏のお荘厳』の作り直し作業を二〇二四年度より始めている。まずは、スタッフによる発表、学習を行った。

「真宗の仏事 研究・学習班」 *五十音順
小島智 (第31組正光寺/教化センター業務嘱託)「お内仏の歴史的変遷」*今回は報告省略

内藤啓喜 (第21組成信寺門徒/株式会社大黒屋仏壇店代表取締役)

林俊成 (第31組瑞光寺)

安井圭 (第26組徳照寺)

吉田暁正 (第2組清勝寺/教化センター業務嘱託)「ご本尊の現代的意味」*今回は報告省略



荘厳の意義

荘厳の意義を「指方立相」であると定義したい。「指方立相」とは善導大師の著書『観経疏』定善義の像観にあるお言葉です。またいまこの観門は等しくただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。

このお言葉から考えなければならぬことは、「私たちはどこに仏様の世界があるのか分からない」という事実です。阿弥陀如来はどこまでも利他的です。浄土が分からない私たちのために浄土という相を立てたのです。仏の方から一切衆生のためにどちらの方向に仏の世界があるのか示したのです。

しかし、私たちは「仏様の世界(浄土)が分からない」という事実を抜きにして、浄土の荘厳を考えてしまいがちです。それでは単に知識が増えただけで、自分自身をいただいていく意味を持ちません。

そうではなく、「指方立相」のお言葉から、浄土がどこにあるのか分からない、私たちの迷いの身の事実に戻ることが大切なのです。そのときに初めて浄土の荘厳の意義を考えることと、自分自身をいただいていくことが一つになるのではないのでしょうか。

安井 圭

仏壇業界の現実

私は、名古屋大須南の本町通り通称「仏壇通り」で仏壇仏具の小売業を営んでいる立場から、「仏壇業界の現実」を課題テーマとして研究に取り組みました。

まず、名古屋地区で江戸時代から広く使われてきた仏壇である「名古屋仏壇」について起源の歴史や特徴を調べるとともに、現在流通している仏壇は意匠やサイズ、素材や工法によって、金仏壇(名古屋仏壇はこの中に分類されます)、唐木仏壇、モダン仏壇、ミニ仏壇、手元供養用具と五つに分類化されることを確かめました。直近十年間でモダン仏壇とミニ仏壇が極端に需要を拡大し、その反面で金仏壇と唐木仏壇の需要が激減している傾向が自社データからも明らかにになりました。

その原因として、

- 一. 和室がない住環境の増加
- 二. 少子高齢化により子どもいない世帯と单身者世帯が増加しており、継承を前提とする仏壇へのニーズが大きく変化したこと
- 三. ECサイトやホームセンター、大型家具量販店という新規参入業者の増加、が起因しているのではないかと、この見解を業界紙の提供データを元にして示しました。

今回の研究で仏壇業界が大きな過渡期を迎えている現状を再認識しました。それを研究・学習班の末席の一員として、『お内仏のお荘厳』の改訂にどのような形で落とし込んでいけるのかを今後は考えていきたいと思っています。

内藤 啓喜

お内仏に対する意識調査

今回「お内仏に対する意識調査を通じた学び」として、「世間の一般大衆」ではなく、「目の前の一人」と向き合うことを目的に、月忌参りの際に、研究発表があることを伝えた上で、「お内仏についてどう思うか?」という形で話題を提供し、自由に語っていただいた。以下、得られた話の内容を要約して報告する。

(一)故人や仏との「対話の場」

ある方は、お内仏は「故人に思いを伝えるシンボル(象徴)」と言われた。別の方は、外では隠しているつらい気持ちを、仏前でのみ、語る事ができると明かされた。(二)家族の来歴を振り返る「よすが」

お内仏のご本尊と密接に結びついた空襲の記憶や、お給仕をしていた家族の思い出を語られた方もいた。

(三)手を合わせる「習慣の基盤」

朝のお勤めをしないと一日が始まらない、一日の終わりに仏前でその日の出来事を振り返る習慣ができた、との声もあった。研究・学習班での議論では、「日常と非日常」について話が及んだ。葬儀や年忌法要といった数年に一度の「非日常」の場だけではなく、毎日のお朝事、毎月の月忌参りのような「日常」において、仏前に身を置き、語り合うことの重要性が確認された。

今回、「お内仏」という言葉を手掛かりに、一人ひとりの人生の歩みや、抱えている課題について、より深い話をうかがうことができた。各人の思いを尊重しながら、日々、ともに教えを聞いていきたい。 林 俊成

研究業務報告 (2024年12月～2025年5月)

①大谷派の近現代史

- 第36回「平和展」開催
3月18日から24日にかけて、第36回「平和展」「真宗大谷派の海外侵出—『満州開教』(『満蒙開拓団』編)—を開催した。期間中、約200名の方々にご来場いただき、「満蒙開拓団」の実態や真宗大谷派が「開拓団開教」に注力した様子を展示した。23日には、平和展スタッフによる展示解説が行われ、来場された方々が熱心に質問する姿が見られた。
- 平和展特別学習会 開講
(3月19日/別院対面所/約40名聴講)
講師：寺沢 秀文氏 (満蒙開拓平和記念館館長)
「満蒙開拓団の史実から学ぶもの」
「満蒙開拓団」の歴史的背景や実情が解説された。また、現代を生きる私たちには、自分事として史実を学ぶことが問われていると提起された。なお、講演の様子は、当センターのYouTubeチャンネルにて公開予定。
- 平和展学習会 実施
12月13日・1月29日・
2月17日・25日・5月15日



②尾張の真宗史

- 教区内外の真宗大谷派寺院所蔵法宝物の調査
★2・3面に関連記事を掲載
- 『御消息』を読む会 実施
4月14日

③現代社会と真宗教化

- グリーンケアスタッフ学習会
4月22日
- ★6面にグリーンケアの記事を掲載
- 学習テキスト『御同朋を生きる』を通して、当センター関係者による「是旃陀羅」問題の学習 実施
12月24日・1月17日・2月12日・3月21日・
4月30日・5月29日

④真宗の仏事 研究・学習班

- 学習会、『お内仏のお荘厳』改訂協義 実施
12月20日・1月15日・2月28日・3月7日・
4月18日・5月15日
- ★7面に報告記事を掲載
- 特別講座「真宗のご本尊の歴史の変遷」開講
(2025年1月15日/教務所1階 議事堂/20名聴講)
講師：青木 馨氏 (同朋大学仏教文化研究所客員所員、
真宗大谷派蓮成寺 (碧南市) 住職)

《雑感》誰かと時間や行動をともにするよりも、気兼ねのないお一人様が好きだ。しかし、多様な価値観や経験を持つ人々との交流を通してこそ、自分だけでは得られない視点が開かれ、一人では到達できない結果が生まれるのも事実である。親鸞聖人が善鸞義絶にあたり「破僧罪」(『御消息拾遺』)を指摘された背景には、僧団を意識されていたことが窺える。それでは、真宗における僧伽とは如何なるものか。10年以上にわたり私が考え続けている課題である。「教区教化のセンター」を教区の皆様とともに考え、ともに実働していきたい。その先に僧伽が形成されるという期待を込めて。(た)

■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00
〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間



教化センター-SNS

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】<https://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

研修業務報告 (2024年12月～2025年5月)

①聖典研修「『正信偈』を読む」開講

- 講師：梶原 敬一氏 (姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)
- 第二回 12月6日 34名聴講
- 第三回 1月24日 26名聴講
- 第四回 3月14日 25名聴講
- 第五回 5月16日 23名聴講
- *全5回/教務所1階 議事堂
- 2023年度、2024年度は『正信偈』を学んだ。
- 2025年度は鶴見晃氏 (同朋大学教授) を招き、『観無量寿経』を学ぶ。
- ★この頁下部「INFORMATION」参照



②研究生学習会

- 「観経序分に学ぶ ～『現代の聖典』を読む～」
講師：荒山 淳氏 (教化センター前主幹)
3月11日
- グリーンケア
講師：吉田 暁正氏 (業務嘱託[研究])
12月9日
- 別院報恩講 (自由参拝)
12月13日～18日
- 教化センター報恩講 勤修
(修了報告中間発表)
1月22日
- 研究生奉仕団
2月26日・27日
- 修了レポート報告会、修了証授与式
4月24日
- ★4・5面に研究生第14期生修了報告を掲載



◎教区教化のセンター 検討会議①、②

あるべき教化センターのすがたとその具体化に向けて、話し合いの場を設けている。2024年度当初より、教化センタースタッフによる検討会議①、また教化委員会、別院職員より選ばせていただいた方と教区駐在教導、教化センター職員で構成する検討会議②を設け、協議を重ねている。

- 検討会議①
2024年12月11日、
2025年1月10日、2月3日、3月3日、4月4日、5月9日
- 検討会議②
2024年12月9日、
2025年1月10日、2月25日、3月28日、4月28日

INFORMATION

◆2025年度「聖典研修」(予定)

テーマ「『観無量寿経』の教え—「観経和讃」を通して—」
講師：鶴見 晃氏 (同朋大学文学部仏教学科教授)
時間：午後6時～8時
会場：教務所1階 議事堂
期日：(全5回)

- 第1回 2025年10月10日 (金)
- 第2回 12月9日 (火)
- 第3回 2026年2月24日 (火)
- 第4回 4月7日 (火)
- 第5回 6月2日 (火)



鶴見 晃氏

◆研究生第15期生

前号でご案内した研究生第15期生が、7月より始動します。教区内の大谷派寺院に所属する満20歳以上の方を対象に募集を行い、僧籍の有無にかかわらず13名の方々にご応募いただきました。

※募集はすでに終了しています。